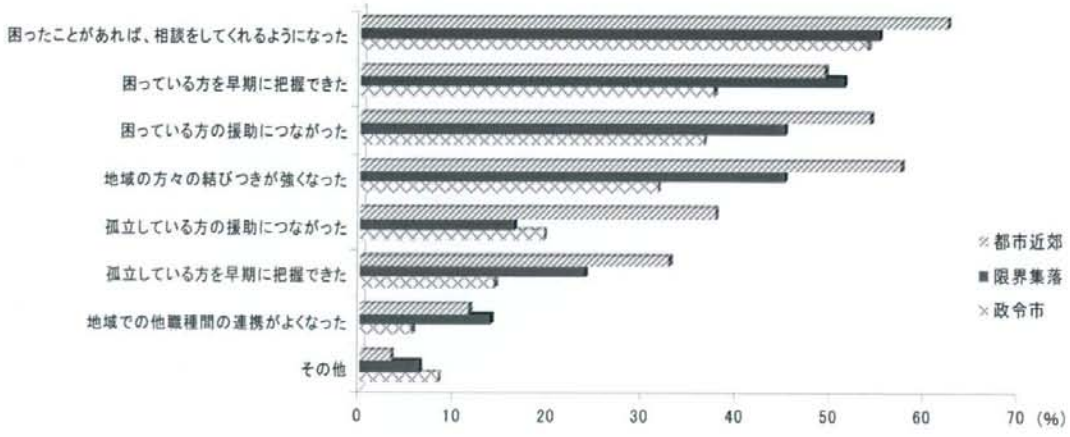

図9 地域別に見た見守りの効果について (複数回答 n=394)

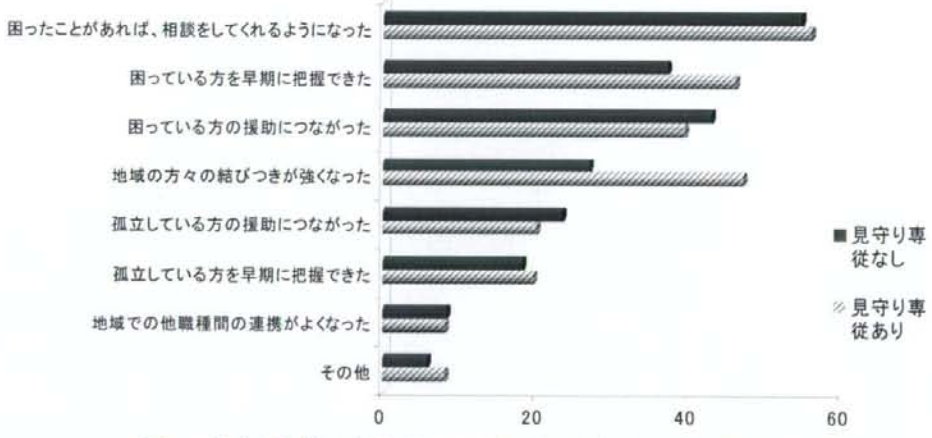

図10 見守り専従の有無別にみた見守りの効果 (複数回答 n=394)

9) 見守り上の困難

(1)地域別

地域別にみた見守り上の困難については、政令市では、「情報が得られにくい」、「不在など本人の動向がつかめない」、「自分一人での見守りでは荷が重い」の順であった。限界集落では、「自分が忙しくて見守りできない」、「情報が得られにくい」、「自分一人の見守りでは荷が重い」の順であった。都市近郊では、「情報が得られない」、「自分一人での見守りの荷が重い」、「不在など本人の動向がつかめない」の順であった(図 11)。

(2)見守り専従の有無別

見守り専従ありの群では、「不在など本人の動向がつかめない」、「情報が得られにくい」、「自分ひとりでの見守りは荷が重い」の順であった。見守り専従なしの群では、「情報が得られにくい」、「自分ひとりの見守りは荷が重い」、「自身が忙しくて見守りができない」の順であった(図 12)。

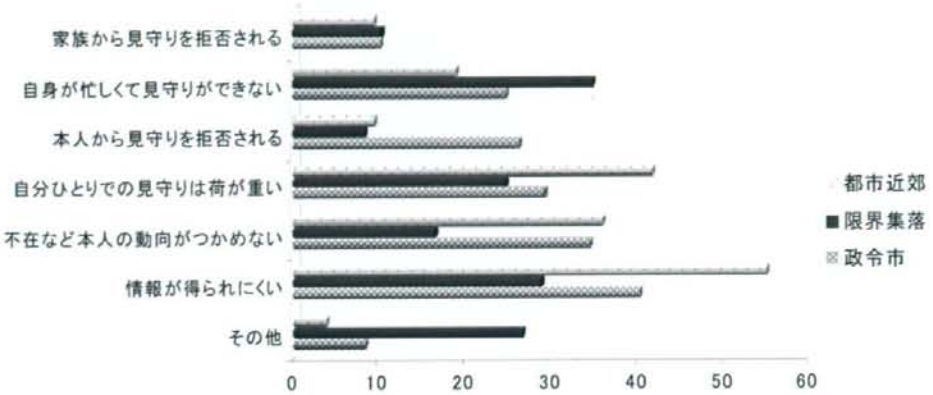

図11 地域別に見た見守り上の困難 (複数回答 n=309)

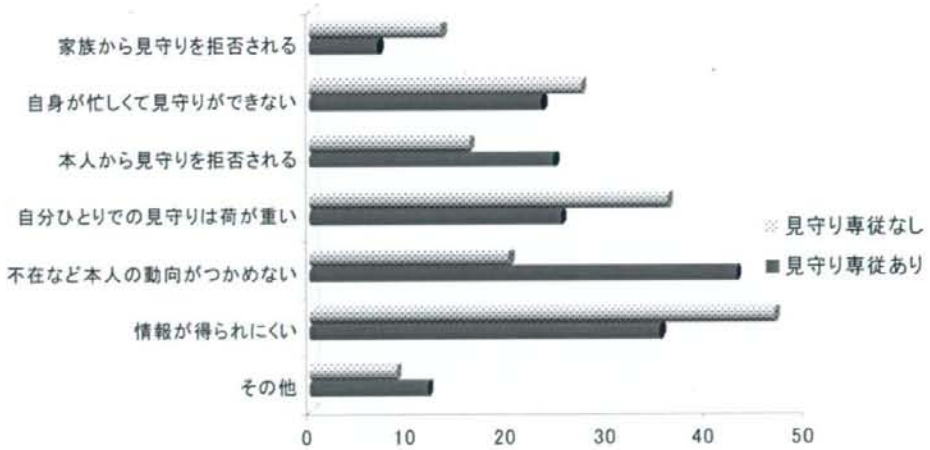

図12 見守り専従の有無別にみた見守り上の困難 (複数回答 n=309)

10) 高齢者人数の把握

(1)地域別

地域別に見た高齢者人数を把握している人の割合は、政令市 62.7%、限界集落 74.2%、都市近郊 69.2%であったが、有意差はなかった(表 9)。

(2)見守り専従の有無別

見守り専従ありの群では、高齢者人数を把握している人の割合は 72.2%で、見守り専従なしの群の 58.6%に比べて有意に高かった(P<0.01)(表 9)。

表 9 高齢者人数の把握 (n=514)

変数	高齢者人数把握 している	高齢者人数把握 していない 人数(%)	P 値
地域			
政令市	215 (62.7)	128 (37.3)	
限界集落	69 (74.2)	24 (25.8)	n . s
都市近郊	54 (69.2)	24 (30.8)	
見守り専従の有無			
見守り専従あり	195 (72.2)	75 (27.8)	＊＊
見守り専従なし	143 (58.6)	101 (41.4)	

＊P<0.05, ＊＊P<0.01

11) 情報が得られにくい高齢者の有無

表 10 情報が得られにくい高齢者の有無 (n=454)

変数	情報が得られにくい高齢者の有無 いる	情報が得られにくい高齢者の有無 いない 人数(%)	P 値
地域			
政令市	204 (64.8)	110 (35.2)	
限界集落	35 (41.7)	49 (58.3)	＊＊
都市近郊	30 (50.0)	30 (50.0)	
見守り専従の有無			
見守り専従あり	120 (47.1)	135 (52.9)	＊＊
見守り専従なし	149 (73.0)	54 (27.0)	

＊P<0.05, ＊＊P<0.01

(1)地域別

政令市では、「情報が得られにくい高齢者がいる」と答えた人の割合は 64.8%で、限界集落の 41.7%、都市近郊 50.0%に比べて有意に高かった(P<0.01)(表 10)。

(2)見守り専従の有無別

見守り専従なしの群では、「情報が得られにくい高齢者がいる」と答えた人の割合は 73.0%で、見守り専従ありの 47.1%に比べて有意に高かった(P<0.01)(表 10)。

12)孤立死という言葉をきいたことがあるか

表 11　孤立死という言葉を聞いたことの有無 (n=553)

変数	孤立死という言葉をきいたことがあるか ある	ない　人数(%)	P 値
地域			
政令市	350 (94.9)	19 (5.1)	
限界集落	98 (92.5)	8 (7.5)	＊＊
都市近郊	64 (82.1)	14 (17.6)	
見守り専従の有無			
見守り専従あり	260 (89.3)	31 (10.7)	＊＊
見守り専従なし	252 (96.2)	10 (3.8)	

＊P<0.05, ＊＊P<0.01

(1)地域別

都市近郊では、「孤立死という言葉をきいたことがない」と答えた人の割合は 17.6%で、政令市 5.1%、限界集落 7.5%に比べて有意に高かった(P<0.01)(表 11)。

(2)見守り専従の有無別

見守り専従なしの群では「孤立死という言葉をきいたことがある」と答えた人の割合は 96.2%で、見守り専従あり 89.3%に比べて、有意に高かった(P<0.01)(表 11)。

13) 孤立死の危険性が高い高齢者の有無

表 12　孤立死の危険性が高い方の有無 (n=464)

変数	孤立死の危険性が高い方の有無 いる	いない　人数(%)	P 値
地域			
政令市	120 (40.7)	175 (59.3)	
限界集落	21 (22.6)	72 (77.4)	＊＊
都市近郊	27 (35.5)	49 (64.5)	
見守り専従の有無			
見守り専従あり	68 (27.2)	182 (72.8)	＊＊
見守り専従なし	100 (46.7)	114 (53.3)	

＊P<0.05, ＊＊P<0.01

(1)地域別

限界集落では、「孤立死の危険性が高い高齢者がいない」と答えた人の割合は 77.4%で、政令市 59.3%、都市近郊 64.5%に比べて有意に高かった(P<0.01)(表 12)。

(2)見守り専従の有無別

見守り専従ありの群では、「孤立死の危険性が高い高齢者がいない」と答えた人の割合は 72.8%

で、見守り専従なしの群 53.3%に比べて有意に高かった(P<0.01)(表 12)。

14) 孤立死の危険性が高いと考える理由

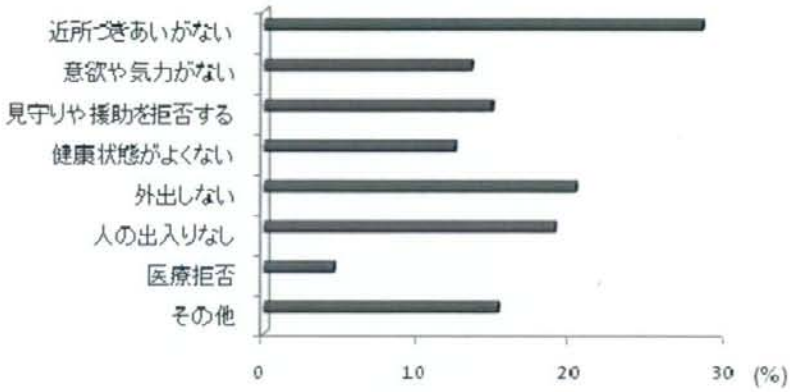

図13 孤立死の危険性が高い理由 (全体)

孤立死の危険性が高いと考える理由は、「近所づきあいがない」、「外出しない」、「人の出入りなし」の順であった(図 13)。

15) 孤立死の有無

表 13 孤立死の有無 (n=508)

変数	孤立死の有無 あった	ない 人数(%)	P 値
地域			
政令市	107 (32.0)	227 (68.0)	
限界集落	12 (12.4)	85 (87.6)	＊＊
都市近郊	20 (26.0)	57 (74.0)	
見守り専従の有無			
見守り専従あり	59 (21.4)	217 (78.6)	＊＊
見守り専従なし	80 (34.5)	152 (65.5)	

＊P<0.05, ＊＊P<0.01

(1)地域別

限界集落では、担当地区で「孤立死があった」と答えた人の割合は 12.4%で、政令市 32.0%。都市近郊 26.0%に比べて有意に低かった(P<0.01)(表 13)。

(2)見守り専従の有無別

見守り専従なしの群では、担当地区で「孤立死があった」と答えた人の割合は 34.5%で見守り専従ありの群 21.4%に比べて有意に高かった(P<0.01)(表 13)。

16）見守り活動による孤立死の防止

表 14　活動による孤立死の防止（n=493）

変数	活動による孤立死の防止 できる	できない　人数(%)	P 値
地域			
政令市	228 (71.7)	90 (28.3)	
限界集落	74 (73.3)	27 (26.7)	*
都市近郊	41 (55.4)	33 (44.6)	
見守り専従の有無			
見守り専従あり	195 (74.1)	68 (25.9)	*
見守り専従なし	148 (64.3)	82 (35.7)	

＊P<0.05, ＊＊P<0.01

(1)地域別

活動によって孤立死が防止については、「できる」と答えた人の割合は、近郊都市は 55.4%で、政令市 71.7%、限界集落 73.3%に比べて有意に低かった(P<0.05)(表 14)。

(2)見守り専従の有無別

見守り専従ありの群では、見守り活動によって孤立死を防止できると考えている人の割合は 74.1%で、見守り専従なしの群 64.3%に比べて有意に高かった(P<0.05)(表 14)。

<まとめ>

1. 対象者の属性

今回の調査地区は、見守り専従の有無について、「あり」「なし」ともにほぼ 2 分していた。

解析対象者は、女性が 7 割以上を占め、年齢は、60 歳代と 70 歳以上で 7 割以上であった。今回の調査地区では、60 歳以上の女性を中心に、民生児童委員、地区福祉委員の役割として地域見守り活動が行われていることが明らかになった。

2. 見守り体制

1）見守り専従の専門職

今回の調査対象地域は、10 か所のうち、1 政令市では、見守り専従の専門職が地域包括支援センターに 1 名配置されている。専門職のいない地域では、住民は、自分の生活時間を使いながら見守り活動を行うことに対し、負担を感じており、住民を支援する見守り専門職の存在が必要であることが示された。

2）見守り基準

見守りをしている対象者は、主に、ひとり暮らしや高齢世帯で健康状態のよくない高齢者や認知症のある高齢者で、訪問、電話、近隣住民との協力によって見守りを行っていた。見守りのいきさつは、都市部では、現在の日常生活や健康状態の把握や民生委員や専門職からの依頼が多く、

限界集落では、近隣住民からの相談や本人からの相談が多く、両者の間で見守り対象者の選定システムに差異がみられた。

見守り専従ありの群では、見守り基準ありと答えた人の割合が高いことから、見守り専従の専門職は、住民が見守り基準を明確にもちながら見守りを行うための支援を行っていると考えられる。また、3政令市のうち、2政令市の3区では、見守り基準(ものさし)が作成されていたことから、住民の声からもより見守りをしやすかった様子が窺えた。

3. 見守りの効果、困難な点について

見守りの効果については、見守り対象者が困った際に相談してくれるような関係作りができ、早期把握につながると考えていることが明らかになった。

都市部で見守り専従がいないところでは、人との交流が少ない高齢者は孤立死の危険性が高いと感じていても、情報が得られにくいために情報不足や対象者の動向が不明なことで、見守りが困難だと感じていることが示された。

4. 孤立死について

限界集落では、都市部と比べて、孤立死が少なく、孤立死の危険性が高いとは受け止められていない。また、見守り専従なしの群では、「孤立死があった」と答えた人の割合が高かったことから、見守り専従の専門職がいることで、孤立死の防止に役立っている可能性が示された。

見守り活動による孤立死の防止については、見守り専従ありの群で「見守り活動によって孤立死が防止できる」と考えている人の割合が高いことから、日々、住民の見守り活動における支援者として、孤立死防止における見守り専従の役割は大きいと考える。

全体を通してのまとめ

今回の調査10市区町村では、都市部ほど見守りが必要な高齢者に対する情報が入りにくく、孤立死の危険性が高い高齢者の存在を感じながら、見守りを行っている。都市部ほど、地域見守り活動を組織化されている傾向が強く、組織的に見守り対象者のフォローを行っている。一方、限界集落では、見守りを意識しなくても日常の近隣相互のつながりですでに見守りができている傾向が強い。しかし、住民は、見守りに対する負担を感じており、見守り専従の専門職による支援が必要であると考える。

活動による孤立死の防止に関しては、見守り活動によって孤立死を防止できると考えている人の割合が高いことから、地域における日常の見守り活動が必要性であることが示された。

見守り専従がある群では、見守りの基準をもって見守りを行っている人の割合および見守り活動による孤立死防止が可能と考えている人の割合が高い傾向にある。このことから、見守り専従の専門職は、地域見守り活動における活動面および精神面で住民を支援する役割を果たしていると考えられる。以上のことから、今後の課題として、地域見守り活動における見守り専従の具体的な活動や役割、具体的な地域見守り活動システムの差異について明確化することが必要である。

第３章　見守り組織地域住民と専門職へのインタビューと質的分析

1. 目的

本章では、高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のありかたについて検討を行うために、見守り組織メンバーとなっている地域住民と見守り組織を支援してきた専門職へのインタビューデータを基にした質的帰納的な分析を行った。地域における見守り組織のありかたを検討する際には、それぞれの地域の住民組織体制や地域性による違いをふまえることが必要である。

本研究では、当該研究プロジェクトの対象地域のうち、既に見守り活動を数年にわたって実施している地域として羽曳野市と見守り活動を始めたばかりの地域として泉南市を選択し、両地域間で見守り組織メンバーや見守り組織を支援してきた地域包括支援センター等の専門職がとらえている見守り対象となる高齢者の状況、見守り支援のためのテクニックや組織づくりなどの差異を比較検討することを目的としている。なお、分析対象とした２つの市は、いずれも大阪府下の都市近郊市として特徴づけられる。

2. 方法

1) 調査対象者と方法

本研究のデザインは質的帰納的研究である。調査対象者は、見守り組織メンバーとなっている地域住民と見守り組織づくりを支援してきた地域包括支援センター等の専門職である。地域住民については、羽曳野市は 9 人と泉南市 11 人の計 20 人、見守り組織を支援してきた専門職については、羽曳野市は 11 人と泉南市 2 人の計 13 人である。なお、地域住民については、それぞれの市から 4 地区ずつ選択し、面接を実施した。

羽曳野市は 2008 年 3 月に、泉南市は 2008 年 8～9 月に、インタビューガイドを用いた半構成的面接を研究者らが実施した。面接時間は約 60 分程度である。面接の形態は、個別に実施した場合とグループで実施した場合とがある。見守り組織の地域住民に面接を行う場合は、地域包括支援センター等の職員が同席し、意見をいいやすい雰囲気になるように努めた。対象者の概要と面接の実施状況については、表 1 (羽曳野市表 1-1ＡＢ，泉南市表 1-2)に示すとおりである。

表 1-1Ａ　羽曳野市におけるインタビュー対象者の概要

［見守り組織の地域住民］

面接状況	事例	性別	年代	地域での役職
グループ面接 1	H1	男性	70 代	区長
グループ面接 1	H2	女性	60 代	民生・児童委員
グループ面接 2	H3	男性	50 代	区長
グループ面接 2	H4	男性	60 代	民生・児童委員
グループ面接 2	H5	男性	60 代	民生・児童委員
グループ面接 3	H6	男性	70 代	区長
グループ面接 3	H7	女性	60 代	民生・児童委員
グループ面接 4	H8	男性	70 代	民生・児童委員
グループ面接 4	H9	女性	60 代	民生・児童委員

表 1-1B　羽曳野市におけるインタビュー対象者の概要

［地域包括支援センター職員］

面接状況	事例	性別	年代	職業
個人面接 1	H10	女性	40 代	保健師
グループ面接 1	H11	男性	30 代	社会福祉士
グループ面接 1	H12	男性	30 代	介護福祉士
グループ面接 1	H13	女性	20 代	社会福祉士
グループ面接 1	H14	女性	50 代	社会福祉士
グループ面接 1	H15	男性	30 代	社会福祉士
グループ面接 1	H16	男性	30 代	社会福祉士
グループ面接 1	H17	女性	50 代	社会福祉士
グループ面接 1	H18	男性	30 代	社会福祉士
グループ面接 1	H19	男性	30 代	介護福祉士
グループ面接 1	H20	女性	20 代	社会福祉士主事

表 1－2　泉南市におけるインタビュー対象者の概要

［見守り組織の地域住民］

面接状況	事例	性別	年代	地域での役職	該当地区居住年数
グループ面接 1	S1	女性	60 代	民生委員	40 年
グループ面接 1	S2	女性	60 代	婦人会役員	38 年
グループ面接 1	S3	女性	60 代	民生委員、婦人会役員	37 年
グループ面接 2	S4	女性	70 代	地区福祉委員、人権擁護委員	32 年
グループ面接 2	S5	女性	60 代	地区福祉委員	32 年
グループ面接 2	S6	女性	50 代	地区福祉委員　児童委員	32 年
グループ面接 3	S7	男性	40 代	自治会長	14 年
グループ面接 3	S8	男性	60 代	民生委員	32 年
グループ面接 4	S9	女性	60 代	地区福祉委員	30 年
グループ面接 4	S10	女性	50 代	地区福祉委員	30 年
個人面接 1	S11	男性	70 代	民生委員　地区福祉委員	34 年

［地域包括支援センター職員］

面接状況	事例	性別	年代	職業	現職場での従事年数
個人面接 1	S12	女性	40 代	特別養護老人ホーム 主任ケアマネージャー コミュニティ・ソーシャルワーカー	12 年
個人面接 2	S13	女性	40 代	地域包括支援センター 主任ケアマネージャー	4 年

2）方法

インタビューガイドの内容は、大まかには「①調査対象者の知っている事例」と「②見守り支援に関する内容」とに分けられる。インタビューガイドは見守り組織の地域住民と専門職はともに、同様のものを使用した。

前者の「①調査対象者の知っている事例」については、在宅高齢者における孤独死の事例、見守りが難しい事例、見守りの必要性の有無が把握できない事例、孤立している住民をうまく援助できた事例およびできなかった事例について、できるだけ具体的に把握できるようにたずねた。後者の「②見守り支援に関する内容」については、当該地区の見守りネットワーク活動で困っていること、当該地区見守りネットワークが行っている活動や行政・専門職との連携状況、当該地区見守りネットワークが果たすことのできる役割と今後の課題、高齢者の孤立や孤立死防止のために行政や専門職に求める役割、見守り組織をつくるまでの今までの経緯および地域包括支援センターや住民の働きかけや役割などについて、把握することを意図してインタビューを実施した。

以上のインタビュー内容について、調査対象者の同意を得てICレコーダー等に録音し、逐語録を作成した。なお、すべての対象者から録音の同意を得ることができた。

2）分析

逐語録から高齢者の孤立死、見守り支援のありかたや組織づくりに関連すると思われる内容を意味毎にくぎり、可能な限り、対象者の表現を活用し、コードをつけた。さらに、コードをもとに、羽曳野市と泉南市との特性を比較しながら、カテゴリを作成し、さらにカテゴリをまとめて、テーマとした。これらの分析過程では、研究グループ内で数回にわたり、討議を行い、コード、カテゴリ、テーマ等の表現と分析の適切性を確保するように努めた。

3）倫理的配慮

調査対象者には書面と口頭で本研究の趣旨、目的と方法を説明し、対象者から文書にて同意を得た。また、調査協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止可能であること、研究目的以外では得られたデータを使用しないことを説明した。なお、本研究は、甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会から承認をうけて実施している。

3. 結果

1) 見守り組織の地域住民へのインタビューの質的分析結果

泉南市と羽曳野市とそれぞれ地域別にみた見守り組織の地域住民へのインタビューから得られた質的分析についてのテーマとカテゴリを表 2-1、表 2-2～4 に示す。

表2－1　見守り住民に対するインタビューから得られた質的分析の概要-1

テーマ	カテゴリ	
	羽曳野市	泉南市
孤立死のとらえかた	元気な人が独りで急に亡くなることもある。 自分の地域では孤立死は起こらない。 見守っていても孤立死を完全に防ぐことはできない。 見守っていても独りで急に亡くなることもある。	元気な人が独りで急に亡くなることもある。 低所得者の多い地域に孤立死が多い。
孤立死発見のプロセス	新聞がたまっていて孤立死に気づいた。 電気がついたままだったので孤立死に気づいた。 雨戸を閉めていなかったので孤立死に気づいた。 見守りのために訪問したら独りで亡くなっていた。 孤立死をした高齢者は死後、家族と連絡がとりにくかった。 予め連絡先を把握していたので孤立死後も家族に連絡をとりやすかった。	新聞がたまっていて孤立死に気づいた。 悪臭があったので孤立死に気づいた。 生活保護費をとりにこなかったので孤立死に気づいた。 孤立死をした高齢者は死後、家族と連絡がとりにくかった。 孤立死の場合、亡くなったことも家族が近隣に知らせない。
見守り対象となる高齢者	人に頼ろうとしない高齢者 人とのつながりを拒否する高齢者 人との交流が少ない独居の男性高齢者 地域とのつながりが少ない集合住宅に住む高齢者 近所づきあいから孤立している高齢者 近所に知らせずに家を空ける高齢者 個人情報保護の理解が異なり自分の情報を話さない高齢者 家族関係の問題が多い高齢者 認知機能低下による問題行動がある高齢者 火の不始末をする高齢者 食事をしていない高齢者	人に頼ろうとしない高齢者 人とのつながりを拒否する高齢者 人との交流が少ない独居の男性高齢者 地域とのつながりが少ない集合住宅に住む高齢者 近所づきあいから孤立している高齢者 集まりに誘っても反応しない高齢者 個人情報保護の理解が異なり自分の情報を話さない高齢者 家族関係の問題が多い高齢者 未婚の息子1人に介護されている高齢者 認知機能低下による問題行動がある高齢者

表2－2　見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要-2

テーマ	カテゴリ	
	羽曳野市	泉南市
見守りのためのテクニック	対象者のニーズに応える	対象者のニーズに応える
	見守りの訪問より、サロンを勧める方がとっかかりやすい	見守りの訪問より、サロンを勧める方がとっかかりやすい
	対象者には見守りからかかわり始める	サロン参加者に電話でフォローしている
	既存のサービスを使って、安否確認をする	既存のサービスを使って、安否確認をする
	見守りを行なうための対象者への働きかけ	変化があれば声をかける
	対象者の情報を把握しておく	用がなくても近くに行き声をかける
	見守り対象者は独居と特定所帯	相手の気持ちに立ち入りすぎないで、見守る
	見守り頻度は月２回	情報提供をしている
	見守り台帳や名簿を作成し、集計する	長い支援の積み重ねにより関係づくりができる
		高齢者と長い間付き合っていると見守りをしやすい
	自発的に情報収集をする	管理組合の名簿から見守り対象者を把握
	情報源を明らかにしない	高齢者の理解を深めることが必要

表2－3　見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要-2

テーマ	カテゴリ	
	羽曳野市	泉南市
見守りのための組織作り	既存組織があり、見守りに活用しやすい	既存組織があり、見守りに活用しやすい
	行政と連携をとる必要がある	行政と連携をとる必要がある
	住民組織間で情報を共有する	住民組織間で情報を共有する
	住民に地域の情報を伝える	
	地域包括支援センターは連携しやすい	地域包括支援センターは連携しやすい
		地域包括支援センターの周知が必要
		地域包括支援センターと情報を共有したい
	専門職別に活動形態が異なる	
	民生委員の職務は見守り	
	民生委員の職務に協力してもらう	
	民生委員の職務内容の周知が必要	
	見守りをシステム化する	
		組織作りの過程での行政のバックアップ
	リーダーがいれば、地域はまとまる	リーダーとバックアップする人がいれば組織は大きくなる
		組織づくりの核が大切
		男性に支援者になってもらう
	地域の絆の強さ	地域の絆の強さ

		転入者が多く、協力し合う思いがあった
		子育て時の付き合いが地域づくりに生かされている
	近隣住民の見守りは孤立死予防に役立つ	近隣住民が気にかけてくれる
	見守りで高齢者に役割を持たせる	
	近隣住民や子どもが見守るべき	近所同士で助け合いたい

表2－4　見守り住民に対する面接から得られた質的分析の概要-2

テーマ	カテゴリ	
	羽曳野市	泉南市
見守り困難な点	個人情報が入手できない	個人情報が入手できない
		家の中まで入り込むことが難しい
		誰が見守り対象者かわからない
	区長との情報共有が難しい	
	支援センターから情報提供されない	
	集合住宅は情報把握が困難	集合住宅は情報把握が困難
	女性は男性の見守りに抵抗がある	
	独自の対策をしたいが困難	独自の対策をしたいが困難
	やる気のある担い手がいない	やる気のある担い手がいない
	民生委員になりたがる人がいない	責任が重く人が少ないので、仕事が多く割に合わない
	町会に入らない住民が多く、活動低下している	自治会に入るのは6割
		いろいろな意見を持っている人がおり、地域活動が困難
		転出入が多いとネットワークを作りにくい

（1）孤立死のとらえかた

テーマ「孤立死のとらえかた」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 3 に示す。両地域に共通するカテゴリとして「元気な人が独りで急になくなることもある」がみられた。

羽曳野市に特徴的にみられたカテゴリとしては「自分の地域では孤立死は起こらない」「見守っていても孤立死を完全に防ぐことはできない」「見守っていても急に亡くなることもある」が挙げられた。泉南市では「低所得者の多い地域に孤立死が多い」というカテゴリがみられた。

表3 テーマ「孤立死のとらえ方」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	羽曳野市	泉南市
孤立死のとらえ方	**元気な人が独りで急に亡くなることもある。** 元気な人がトイレでこてっと死ぬ。	**元気な人が独りで急に亡くなることもある。** 「まさか」という人が予期していない形で急に亡くなった。 サロンを開いていた人が孤立死をしていた。 普通に生活していた人が急に独りで亡くなった。 ここ、2、3年 40 代 50 代の人の孤立死が圧倒的に伸びてきている。
	自分の地域では孤立死はおこらない。 孤立死は今までもなくこれからもまずない。 親戚が周囲に多く、孤立死は起こりえない。 私の知っている限り、孤立死はない。	**低所得者の多い地域に孤立死は多い。** 生活保護をうけていて、低所得者の多いところで孤立死が多い。
	見守っていても独りで急に亡くなることもある。 一緒についているわけではないので孤立死は防止できない。 孤立死を防ぐことは不可能なのでいかに早く発見するかが大切である。 孤立死ゼロは絶対に難しい。	
	見守っていても孤立死を完全に防ぐことはできない。 気をつけなあかんと思っていてもコテっといったらわからない。 周りに親戚がいてもどうすることもできなかった。 見守っていたのに独りで亡くなっているのを発見し、何のためかなと思った。	

（2）孤立死発見のプロセス

テーマ「孤立死発見のプロセス」に関するカテゴリとコードの一覧については、表4に示すとおりである。両地域に共通するカテゴリとしては「新聞がたまっていて孤立死に気づいた」「孤立死をした高齢者は死後、家族と連絡がとりにくかった」がみられた。

羽曳野市からは「電気がついたままだったので孤立死に気づいた」「雨戸を閉めていなかったので孤立死に気づいた」「見守りのために訪問したら独りで亡くなっていた」「連絡先を把握していたので孤立死後も家族に連絡をとりやすかった」などのカテゴリがみられた。一方、泉南市で特徴的にみられたカテゴリとしては「悪臭があったので孤立死に気づいた」「生活保護費をとりにこなかったので孤立死に気づいた」「孤立死の場合、亡くなったことも家族が近隣に知らせない」が挙げられた。

表4　テーマ「孤立死発見のプロセス」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	羽曳野市	泉南市
孤立死発見のプロセス	**新聞がたまっていて孤立死に気づいた。** 家の前に新聞がちょっとたまっていて孤独死に気がついた。	**新聞がたまっていて孤立死に気づいた。** 新聞がたまっているということで民生委員やヘルパーが発見する。
	電気がついたままだったので孤立死に気づいた。 朝も夜も電気がずっとつきっぱなし。 あくる朝まで電気がこうこうとついていて家の裏の人が知らせてくれた。 電気がつきっぱなしで「どうも様子がおかしいと近所の人がいってきた。	**悪臭があったので孤立死に気づいた。** 悪臭があるということで発見することもある。
	雨戸を閉めていなかったので孤立死に気づいた。 雨戸も閉めていないのでおかしいと話し合い、家に入ったら亡くなっていた。	**生活保護費をとりにこなかったので孤立死に気づいた。** 生活保護費をうけとりにこなかったので役所から親戚に連絡が入り、家に入ったら亡くなっていた。
	見守りのために訪問したら独りで亡くなっていた。 見守りをしているときにたまたま亡くなっているのを発見した。 福祉委員の言葉が気になって訪問したら玄関先で倒れていた。	
	孤立死をした高齢者は死後、家族と連絡がとりにくかった。 死後、家族になかなか連絡がとれなかった孤独死の高齢者がいた。	**孤立死をした高齢者は死後、家族と連絡がとりにくかった。** 遺体（孤独死）のひきとりがうまくいかなかった。
	予め連絡先を把握していたので孤立死後も家族に連絡をとりやすかった。 「あんしんシステム」で連絡先が記入されていたので家族に連絡がとれた。	**孤立死の場合、亡くなったことも家族が近隣に知らせない。** 家族の方が亡くなったことさえ知らせない。

（3）見守り対象となる高齢者

テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 5 に示すとおりである。両地域に共通するカテゴリは「人に頼ろうとしない高齢者」「人とのつながりを拒否する高齢者」「人との交流が少ない独居の男性高齢者」「地域とのつながりが少ない集合住宅に住む高齢者」「近所づきあいから孤立している高齢者」「個人情報保護の理解が異なり、自分の情報を話さない高齢者」「家族関係の問題が多い高齢者」「認知機能低下による問題行動がある高齢者」であった。

羽曳野市からは「近所に知らせずに家を空ける高齢者」「火の不始末をする高齢者」「食事をしていない高齢者」のカテゴリがみられた一方、泉南市で特徴的にみられたカテゴリとしては「集まりに誘っても反応しない高齢者」「未婚の息子一人に介護されている高齢者」が挙げられた。

表5－1　テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	羽曳野市	泉南市
見守り対象となる高齢者	**人に頼ろうとしない高齢者** プライドがあるので下手なことが言えず、かかわりが難しい。 ご老人を扱うのは難しい。 自分は元気だと思っている高齢者 家族が高齢者をしっかりしていると思いこみ、支援を断る。	**人に頼ろうとしない高齢者** 判断力が遅れていると困っていることが自分で言えない。 遠慮があるので高齢者は人に頼むことができない。 他人に講釈をして人に頼ろうとしない。 銀行の部長だった人とかプライドが高く、かかわりにくい。 人からは高齢者と言われたくない。 年寄りと話をするのが嫌だという 72 歳の高齢者。 娘がいると誰かの世話にならなくても大丈夫と思う。 身内でないと家に入れない高齢者がいる。
	人とのつながりを拒否する高齢者 家族や他人とのつながりを拒否する奇人変人が孤立死しやすい。 近所の手前があるので見守りにきてほしくないという家族がいる。	**人とのつながりを拒否する高齢者** 拒絶する人が孤立死しやすい。
	人との交流が少ない独居の男性高齢者 男の人の独居には身内が来る回数が少ない。 お酒が好きな男性の独居高齢者は生活をちゃんとできない。	**人との交流が少ない独居の男性高齢者** 男性で昔の肩書を捨てられない人は近所で浮いている。 男性は会社生活が長いのでいきなり地域に入れない。 一度近所でういてしまうと声がかけづらい。 いま付き合いがあるのが私くらいの男性高齢者。 （見守りを）やりにくいのは男性。 男性は交流がなくても何ともない。

表5－2 テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	羽曳野市	泉南市
見守り対象となる高齢者	**地域とのつながりが少ない集合住宅に住む高齢者** 府営住宅の一人暮らしは把握が難しい。 独居でマンションに入居する高齢者。 集合住宅のドアから中がわからない。	**地域とのつながりが少ない集合住宅に住む高齢者** 公園は流れ者が多くて地域のつながりが少ない。 生活保護を受けている人でも入れるマンションになり、昔のようなコミュニケーションはとれていない。 近所づきあいが嫌でマンションに入って年をとって外出をしなくなった。 隣近所が干渉しない。 ２、３日会わなくても「最近会わないな」くらいで終わるのが現状。 マンションは入り口を閉められると居るのかどうかすらわからない。 マンションや団地は独居が多い。 マンションだと把握がしづらい。
	近所づきあいから孤立している高齢者 町会費も払わなくて周囲の人と仲が悪い。	**近所づきあいから孤立している高齢者** 自治会費払わないというような家が要注意。 トラブルメーカーも孤立しやすい。 ネコ屋敷だったので近所づきあいがなかった。
	近所に知らせずに家を空ける高齢者 ちょっと連絡してくれたら心配ないんやけどな。 今の人はご近所に「ちょっと行ってきますねん」というのがない。 民生委員に告げずに家をあけるケースが怖い。	**集まりに誘っても反応しない高齢者** 集まってくる方は元気な方ばかりでそこに入れない人をどうす。 サロンにでてこれない人に何かやりたいと思った。 反応する人は元気。 吉本でも釣れない人が３割いる。 反応のない方は閉じこもっている方が多い。 **広報を見ない。見る意欲もなく嫌がっている。** **チラシを配布しても反応がない。**

表5－3 テーマ「見守り対象となる高齢者」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	羽曳野市	泉南市
見守り対象となる高齢者	**個人情報保護の理解が異なり自分の情報を話さない高齢者** 民生委員に自分のことを話したがらない。	**個人情報保護の理解が異なり自分の情報を話さない高齢者** 連絡先教えて、といってもプライバシーといって教えてもらない。 個人情報を勘違いしている人もいて難しい部分がある。

	家族関係の問題が多い高齢者 ケンカ別れしているとか、家庭内でもめているのは難しい。 愛人関係で高齢者の夫婦間がもめている。 息子にやられたとか虐待の問題がある時は難しい。 家族に見放されている。	**家族関係の問題が多い高齢者** 家族がお金だけ高齢者にもらいにくる。 妻の被害妄想がつよくて娘のかかわりも拒絶し、高齢者が受診もできない。 家族から疎外されている人も気をつけていかなアカン。
		未婚の息子1人に介護されている高齢者 息子さんが介護を全部していて困っておられることを一切言わなかった。 介護している息子はストレスを話さない。 未婚の50-60代の息子と母親という家族の虐待が心配になる。 30すぎの息子がお母さんの介護のために仕事をしていないのが気になる。
	認知機能低下による問題行動がある高齢者 住所もわからないのに遠い所に一人で行ってしまった。 認知症の方が朝方にピンポンならして困る。 食事を2つも買ってしまう認知機能が低下している高齢者。 食事をしているのに食べてないという。 見守り対象者が「1万円かして」と毎週やってくる。 認知機能が低下していてお金がないという。	**認知機能低下による問題行動がある高齢者** 徘徊老人が心配だった。
	火の不始末をする高齢者 火事を出してしまいそうな高齢者 お酒が好きでぼやをだす高齢者は気になる。	
	食事をしていない高齢者 食べていない人は気になる。	

（4）見守りのためのテクニック

テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリとコードの一覧については、表 6 に示すとおりである。両地域に共通するカテゴリは「対象者のニーズに応える」「見守りの訪問より、サロンを勧める方がとっかかりやすい」「既存のサービスを使って、安否確認をする」であった。

羽曳野市からは「対象者には見守りからかかわり始める」「見守りを行うための対象者への働きかけ」「対象者の情報を把握しておく」「見守り対象者は独居と特定所帯」「見守り頻度は月 2 回」「見守り台帳や名簿を作成し、集計する」「自発的に情報収集する」「情報源を明らかにしない」のカテゴリがみられた。一方、泉南市で特徴的にみられたカテゴリとしては「変化があれば声をかける」「用がなくても近くに行き声をかける」「相手の気持ちに立ち入りすぎないで、見守る」「情報提供をしている」「長い支援の積み重ねによる関係づくりができる」「高齢者と長い間付き合っていると見守りをしやすい」「管理組合の名簿から見守り対象者を把握」「高齢者の理解を深めることが必要」が挙げられた。

表6－1　テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	羽曳野市	泉南市
見守りのためのテクニック	**対象者のニーズに応える** 検死時は、2 日間拘束された。検死につきあう。 近くにいる病院はないかと相談をうけていた。 訪問していたら奥で苦しがっていたので、救急車を呼んだ。	**対象者のニーズに応える** 求めている高齢者に対応している。 何かあったら電話してや、というてある。 水道がとまらなくて、「どうしたらええやろ」と電話があった。
	見守りの訪問より、サロンを勧める方がとっかかりやすい 会食会では楽しんで帰ってもらう。 会食会の目的は、ふれあいと引きこもり防止。 訪問よりもサロンに力を注ぐべき。（家には踏みこまないように）	**見守りの訪問より、サロンを勧める方がとっかかりやすい** 会食会やサロンで見守る。 民生委員を拒絶する人には、教室を勧める。 サロンあるんですよ、と声かけしたら喜んでくれる。
		サロン参加者に電話でフォローしている サロンに来てくれた人には、月に 1 回電話している。
	対象者には見守りからかかわり始める 基本的に対象者には見守りから入る。	
	既存のサービスを使って、安否確認をする 独居者へあんしんシステムの周知。 指を切ってあんしんシステム活用。 あんしんシステムでつながりを持ってもらう。 あんしんシステムで正確な実態把握ができる。 ヤクルト 1 週間分まとめて入れられるのは問題。 石油配達の人が倒れているのをみて、民生委員に	**既存のサービスを使って、安否確認をする** 安否確認のためのヤクルト配達。ヤクルトの配達で孤立死がわかる。 配食サービスは、見守りにもなる。 配食サービスがなくなって、見守りのチャンスもなくなった。 配食サービスを手伝っているが、気配がおかしいと思ったら、79 才の男性が倒れていた。 自治会費を集めるのも見守りの機会だったが、今は年に 1 回。

	伝えた。 孤立死防止のために、新聞・ヤクルトを取っているかチェック。	

表6－2 テーマ「見守りのためのテクニック」に関するカテゴリおよびコード一覧

テーマ	羽曳野市	泉南市
見守りのためのテクニック	**見守りを行うための対象者への働きかけ** カギの置き場所を決めておく。 近所に安否を知らせるためのツール。 孤立死予防のための声のかけ方。「世話になる」ことを自覚する。 結果的に地域の世話になることを自覚してもらう。 リスクの周知。冬場のトイレで冷やさないよう周知。 近隣住民に対象者から異常を周知させる。	**変化があれば声をかける** 昨日と今日、新聞がたまっているので、どうしたんやろ、と言って声をかける。 心配な人に「何かあったらうちに言ってきてね」とは言っている。 「サロンに来ないし、聞いてみよう」と思った。 **用がなくても近くに行き声をかける** 食事をもっていったり、寄れる時には、声かけに寄る。 何も用がなくても、ひょいと顔を出して、2言、3言かわす。 本人さんが元気にしてはるというのが、家の前を通ってわかる。
	対象者の情報を把握しておく 緊急時に対象者の関係者かすぐにわかるようにしておく。 かかりつけ医の情報を把握しておく。 災害の時に近所に安否や身内を知らせるツールが必要。	**相手の気持ちに立ち入りすぎないで、見守る** 相手の気持ちに立ち入りすぎてもいけない。 声をかける。そっとしておく。その加減というのが相手に対する思いやり。
	見守り対象者は独居と特定所帯 見守り対象者は100名。 見守り基準、独居。 特定所帯を見守り基準に入れる。	**情報提供をしている** 介護サービスを知らない人に、認定を受けたらできると説明した。 「こういうシステムありますよ」といっても年寄りは、全部見落としている。 電話番号を貼ってあげた。